体罰の受容要因についての研究

A Study On The Factors of Acceptance In Physical Punishment

1K10C429-3　村山　遼
主査 木村和彦 先生　　副査 吉永武史 先生

【目的】

本稿は、今現在に至るまで何故体罰が根絶せずに容認され続けているのか、その要因を明らかにし、体罰問題を解決するための一助となることを目的としている。

体罰における定義は非常に難しいが、本研究においては、文部科学省の体罰の定義や先行研究を参考にして、次のように定めた。

体罰とは、その懲戒の内容が身体的性質のもの、すなわち、身体に対する侵害を内容とする懲戒（殴る・蹴る・モノを投げつける等）、被罰者に身体的苦痛を与えるような懲戒（正座等特定の姿勢を長時間にわたって強要させる等）に当たると判断される場合。指導者やコーチからだけでなく、先輩からのものも含む。

【方法】

本研究では体罰が受容される要因は何なのかを明らかにすることを目的に、2013 年 7 月に、早稲田大学スポーツ科学部の学部生 154 名（男性 115 名、女性 39 名）を対象として、以下の項目について質問紙調査を実施した。

1. 中学・高校時代に所属していた運動部活動
2. 運動部活動での体罰経験の有無
3. 他人が体罰をされている所を見たことか
4. 運動部活動における成績について
5. 体罰経験を受けたことがある人を対象に、体罰内容について（自由記述）
6. 体罰に対する考えについて
7. 6.において体罰を容認・渋々容認した人を対象に、体罰を容認する理由について 21 項目を５段階評価で選択

以上の項目より、何故体罰を容認するのか、また運動部活動・スポーツの種類ごとに体罰に対する考えについて違いがあるのか、体罰経験は体罰への考えに統計的に影響しているのか、それらの解明を試みる。

【結果】

体罰が受容される理由として最も平均値が高かったものは「 両者に信頼関係があるのなら体罰があっても良いと考えているから」であった。次に「 愛情のある体罰によって成長するから」が高く、次いで高かったものは「 悪い行いを正すため」という結果となった。

さらに「両者に信頼関係があるのなら体罰があってもよいと考えているから」と「愛情のある体罰によって成長するから」との間に１％水準で有意な相関があることが確認された。つまりこれらどちらかの動機が高い者は、もう一つの動機についても高い傾向が明らかとなった。

逆に理由として平均値が一番低かったものは、「体罰がないと不安」であり、二番目に低かったものが「試合に負けた」、次いで「自分がされた」、「先輩・指導者がしていた」、「体罰をよく見ていた」となった。

さらに体罰受容理由の平均値の下位５項目において、各々全ての間にそれぞれ 1%水準で有意な相関係数があることが確認された。つまり、一つの動機が高い者は、他の動機についても高い傾向が明らかになった。

【考察】

「 両者に信頼関係があるのなら体罰があっても良いと考えているから」と「愛情のある体罰によって成長するから」の要因は、指導者と生徒間にしかわからない感情・想いであり、これらが強固なものであれば他人からはただの暴力、すなわち体罰としか見えないと思っても、当事者は自分を成長させるツールの一つと解釈していると考えることができる。

そして次に平均値が高かった「悪い行いを正すため」は、運動部活動における指導というよりも、学校内における教育である。教育の一環であるから体罰が行われるのは仕方ないと容認する考えがあるため、本調査でも平均値が高かったのだと推測できる。

体罰受容理由の平均値の下位５項目は、体罰が行われてもそれに見合うほどのものが得られない、つまり体罰が無意味に行われるという見解に繋がるため平均値が低かったものと思われる。体罰経験での回答は、ミスや試合に負けたために体罰を受けたという回答が最も多かったが、それらの理由により体罰は受け入れたくはないというのが回答者の本音であると、この結果から考えることができる。

これ以上体罰によって、心に一生消えない傷を抱えてしまわないよう、本調査がスポーツ界・学校での運動部活動内において、体罰根絶のため少しでも役立つことを期待する。